

(4) 薬物使用の問題を抱える HIV 陽性者への支援のための 精神保健福祉センターとのネットワークモデルの検討

- 研究分担者：大木 幸子(杏林大学保健学部)
■ 研究協力者：樽井 正義(特定非営利活動法人ぶれいす東京)
生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究要旨

本調査では、MSM あるいは HIV 陽性者の精神保健福祉センターの薬物相談の利用経験を質的に分析し、当事者にとっての精神保健福祉センターの薬物相談の利用動機、利点、課題等を抽出した。それらの結果から、異性愛者の薬物相談への支援と共通する支援方法並びに特徴的な支援方法を明らかにすることを目的とした。さらに MSM あるいは HIV 陽性者の薬物依存に関する相談支援にあたっての精神保健福祉センターにおける薬物相談の活用について考察した。そのために、精神保健福祉センターの薬物相談の利用経験にある MSM あるいは HIV 陽性者 4 名にインタビュー調査を行った。インタビュー調査で得られた語りのデータを質的に分析し、(1)「利用動機」4 概念、(2)「利用継続理由」3 概念、(3)「継続利用のための戦略」1 概念、(4)「課題」1 概念が抽出された。さらに抽出された概念と、精神保健福祉センター相談担当者のインタビュー調査から抽出された支援方法に関する概念の関連性を検討した。これらの結果から、精神保健福祉センターでの薬物相談は、MSM である HIV 陽性者にとって多様な選択肢として意義があると思われる。その一方で、セクシュアリティや HIV 陽性であることは薬物使用からの回復に向けての根幹の要素であり、より具体的な場面も含めてプログラムで扱える体制や職員のスキルの向上の重要性が示唆された。

A 研究目的

我が国の新規 HIV/AIDS 報告の 8 割は、MSM (men who have sex with men) が占めている。加えて近年、MSM の薬物使用 / 依存の問題が注目されている。MSM の薬物使用は、いわゆる chemsex といわれる性行為での使用が中心であることが、国内外で報告されている¹⁾²⁾。国内の調査においては HIV 陽性者の 74.5% が薬物使用の経験があると回答している³⁾。こうした背景から「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」(2012 年改定)では、個別施策層に薬物乱用者を指定し、薬物関係施策との連携強化を謳っている。

一方、薬物相談の専門機関には、精神保健福祉センター(以下センター)が位置づけられ、「地域依存症対策支援事業」において、SMARPP(薬物依存症者に対する集団認知行動療法プログラム)等の実施が推進されている。2021 年度現在、全国 69 センターのう

ち 42 か所(全センターの 61%)が実施している。薬物依存症の回復のための専門機関は全国的にも少なく、47 都道府県及び 22 政令指定都市に設置されているセンターが、薬物依存専門相談機関として果たす役割への期待は大きい。

2021 年度の大木らの調査では、MSM あるいは HIV 陽性者の薬物相談の経験のあるセンター担当者 5 名にインタビュー調査⁴⁾を行い、「生きづらさ」に着目した支援という点が一般的な薬物依存症者への支援と共通した要因であり、セクシュアリティに伴う性行動に関する情報は、MSM や HIV 陽性である相談者のもつセクシュアリティや HIV 陽性であることの「生きづらさ」を理解する重要な情報として捉えられていた。

そこで、本調査では、異性愛者の薬物相談への支援と共通する支援方法並びに特徴的な支援方法を明らかにするために、MSM あるいは HIV 陽性者の精神保健福祉センターの薬物相談の利用経験を質的に分析

し、当事者にとっての精神保健福祉センターの薬物相談の利用動機、利点、課題等を抽出することを目的とした。

B 研究方法

1. 調査対象者のリクルート方法

精神保健福祉センター長会をとおして、文書にて精神保健福祉センターの利用者に対し、MSM あるいは HIV 陽性者を対象とした精神保健福祉センターの薬物相談の経験についてのインタビュー調査協力の周知を依頼した。あわせて、薬物依存症回復プログラムを実施しているセンター 42 か所には、直接文書を送付し、調査協力の周知を依頼した。また、HIV 陽性者を支援している NPO 団体の広報紙(web サイト)に、調査協力依頼を掲載した。

2. データ収集方法

協力申し出のあった HIV 陽性者 4 名に、個別インタビューを実施した。インタビュー方法は、調査対象者の希望に応じて、2 名は対面で、2 名はオンラインで実施した。

インタビュー内容は対象者の理解を得て、対面の場合は IC レコーダーで、オンラインの場合はビデオ会議機能で録音を実施した。

3. インタビュー内容

インタビュー内容は、以下のとおりである。

- ①精神保健福祉センターの回復プログラム参加に至った経過やきっかけはどのようなことだったか。
- ②参加し、どのような印象をもったか。
- ③継続して参加している理由はどのようなことか。
- ④継続参加する中で、変化したことがあるか。それはどのようなことか。
- ⑤セクシュアリティ等についてプログラム内で伝える、伝えないという点については、どのように考えているか。
- ⑥精神保健福祉センターのプログラムを利用する過程で、気になった点があったか。それはどのようなことか。

⑦精神保健福祉センターのプログラムは、自分の回復にとってどのような意味を持っていると思うか。

⑧薬物の不使用の選択あるいは使用からの回復のためには、どのような時期に、どのような情報、支援、かかわりがあれば、効果的だと思うか。

4. 分析方法

音声データの逐語録を作成し、質的に分析を行った。分析にあたってのリサーチクエッションは、「精神保健福祉センターでの薬物相談利用経験は、地域の自助グループや回復プログラムと比較して異なる点はどのようなことか。特徴的な利用要因はどのようなものか」である。

C 研究結果

1. インタビュー対象者の概要

インタビュー対象者 4 名の概要は以下のとおりであった。いずれも MSM であり HIV 陽性であった。

表 4.1 インタビュー対象者の概要

性別	
男性	4
女性	0
年代	
30 歳代	1
40 歳代	1
50 歳代	2
精神保健福祉センターへの相談経路	
刑務所での紹介	1
精神科医療機関でのポスター掲示や紹介	2
インターネットで検索	1

2. 利用経験に関するカテゴリー

収集したデータを質的に分析した結果は、以下のとおりであった。抽出された概念ごとに、概念の意味、導出された一次データの例を記載した。なお、一次データをイタリック体で表示した。

(1)利用動機

①公的機関として安心感

公的機関であることへの安心感が、利用動機の要因の一つとなっていた。安心感の内容には、セクシュア

リティやHIV陽性であることなどの個人情報が保護されること、さらにそれらについての偏見がないこと、さらに無料であることなどがあつた。こうした公的機関としての姿勢や制度のあり方が、利用動機の大きな要素となつていた。

「こういうことをしかも無料で提供してくれるんだつていうことで、結構そのときはすんなりとすがるように連絡しました。」

②「通報」されないことへの安心感

薬物使用については、通報をされることの不安が対象者にはある。そのため、通報しないということは、利用を後押しする大きな要因である。

「ここは絶対、たとえ今日使つて、そのままぶらつと来ても通報はしないからと。そんな場所が世の中にあるんだと思つてびっくりしましたが、お役所がまさか通報しないなんてみたいなの、衝撃で」

③神保健相談の専門機能への期待

精神保健福祉センターは、薬物相談の相談拠点であると同時に精神保健福祉相談の専門拠点である。すなわち薬物相談以外にもプログラムやサービスを持っている。そうした精神保健相談全般の専門機能を活用する可能性も考えたことが、精神保健福祉センターの利用動機の一つとなつていた。また、専門医療機関や福祉サービスの紹介など、他のサービスや機関への入り口機能への期待も見られた。

「精神疾患の関係の就労支援だとかショートステイ事業とかやってるじゃないですか。なのでそういうサービスもちょっと念頭に置きながらつていうこともあります。」

④「ゲイ・コミュニティ」のネットワーク外であることの安心感

精神保健福祉センターの薬物相談プログラムの参加にあつては、「ゲイ・コミュニティ」のネットワークに直接つながつていないことへの安心感がある。地域には、セクシュアルマイノリティを対象としたNAや薬物相談ミーティングの場もある。そうした場は、セクシュアリティを共有できるため性行為に伴う薬物使用に関する話題も具体的に話しをしやすい、共感を持ちやすいというメリットがあるといずれの対象者も認

めていた。しかしその一方で、同じセクシュアリティの利用者の中には、自分の知人や知人につながる人脈をもつ人がいるかもしれないという点が不安要素となる場合も少なくない。薬物相談プログラムに参加していることを知人や知人につながるネットワークをとおして知人に知られてしまう、さらには「ゲイ・コミュニティ」で広がつてしまうといった不安である。精神保健福祉センターの利用者としても同じセクシュアリティの人に出会う可能性はあるが、セクシュアルマイノリティを対象とした場に比して、その可能性が低いことが参加動機となつていた。

「過去と一緒に薬物を使った人がいたらどうしようつていう恐れが一番強かつたりとか。セクマイのグループも狭いつつ狭いつつ。薬物使つてる人結構、MSMでは多いと思つますし。そうするとなんか気まずいなみたいなのところはあるのかなつていうのがあつて、たぶん行けてないのもあるし。」

(2)継続参加理由

①利用者のもつ課題の共通性への共感

精神保健福祉センターのプログラムの利用者は、セクシュアリティや薬物の使用場面等多様な背景をもつている。すなわち自分とは異なる背景をもつ利用者である。プログラムの中での利用者の語りをとおして、異性愛者の状況が自らの状況と異なつていたことに対する新鮮さや興味深さを感じていた。その一方で、それらの異なる要素に関わらず、抱える生きづらさには共有している面があることが見出される。このような気づきや共感は、薬物相談プログラムがもつ支援機能そのものである。そうしたプログラムの有効性が継続参加の重要な要因となつていた。

「しんどさはほんとに伝わつてきて。同じ依存なんだけど、その依存の形態は違つただけど、その形態の仕方は理解できないところもあるだけど、ここまで飲むとか。自分も、自分もいっぱい飲んじやつたけど、もっとひどくまで飲んでる人もいるし。ギャンプルにのめり込むつていう傾向の仕方も知らないだけど、なんかどつかしんどいとこは似てるところがあつて。そういつたところでなんかたまにいとおしく思つたりとか、なんか親近感湧いたりとかするところはあつたりとかはありました。」

②プログラム内容の参加しやすさや楽しさ

今回の調査対象者は、テキストを用いたミーティングプログラムや作業療法とミーティングを組み合わせたプログラムに参加していた。対象者は、こうしたプログラム内容を確認した上で参加し、それが継続参加の理由となっていた。例えば、フリーなミーティングへの苦手意識があったためテキストのあるミーティングへのなじみやすさがある、作業療法のプログラムに興味をもて楽しみとなったなどである。薬物依存症の専門医療機関や自助グループなどでは、AAスタイルのミーティングが多い。それらと異なるプログラムである点が、精神保健福祉センターの薬物相談プログラムへの参加動機であるとともに、参加しやすいまたは楽しいと思えることでの継続参加の要素となっていた。

「どうしてもNAが苦手なので、それだったらやっぱプログラムのもの、テキスト使ったものが自分にはいいだろうから、せめてここはそういう居場所にしようと思えました。」

③プログラム利用と連動した個別の伴走支援

薬物相談プログラムを利用すると同時に個別の相談が提供されていた。そのような個別相談の中で、福祉サービスの利用や就労の支援が展開されている。このように、集団でおこなわれるプログラムのみではなく、個別相談に基づくケースワーク支援をとおして生活の支援を行われる点は、精神保健福祉センターでの薬物相談継続利用の重要な要素であった。

「そうですね。それこそ生活保護になる時にちょっと、仕組みはこうなってとか、どうやって今後生計、生活していくかとかの相談とか乗ってくれて、まだあんた、あんまり具合が悪そうだからしばらくはおとなしくしてたほうがいいよって言われて、そうだなと思って、ちょっとおとなしくしとこうかなと思って。」

(3)継続参加のためのストラテジー

① HIV ステータス / セクシュアリティの開示の判断

対象者は、精神保健福祉センターの集団プログラムの参加にあたって、グループ内ではHIVステータスやセクシュアリティについて開示せずに参加する場合が少なくない。それは、それらに対する理解が必ずし

も十分でない可能性があるためである。しかし、相談担当者に対しては初回相談においては、自らのHIVステータスおよびセクシュアリティを開示していた。それらの要素は自分の薬物使用と密接に関連した要素であり、そうした情報に触れないで回復のための継続的相談を行うことは難しいという認識がその背景となっていた。また、相談担当職員に対しては、HIV陽性であることやセクシュアルマイノリティであることへの偏見はないだろうという信頼が基盤となっていた。

一方グループ内では、他の利用者との個別の会話の中で偏った受け止め方をしないと予想できた場合や同じセクシュアリティの利用者が参加していることが分かった場合など、グループ内が安心できる場であると認識できた場合は、セクシュアルマイノリティであることがイメージされる表現を用いるなど、緩やかな開示を選択する場合もみられた。

「スタッフ、職員に関しては、まあやっぱり何も抵抗なく受け入れてくれて、話も聞いてくれるって感じなんですけれども、無理に皆の前で話さなくていいよ的な雰囲気をつくってくれて、で、性格的にもそんなにすぐに言えるようなタイプでもないの。まあ、そうですね。それでも、最初から言えたわけではなく、1～2年過ぎたぐらいで、仲良くなれた人から話すようになったっていうのもありますね。」

(4)回復にあたっての課題

①性に関する話題の出しにくさや深まりにくさ

集団プログラムでは、異なるセクシュアリティを持つ利用者の中で、具体的な性行動や性行為に伴う使用欲求などを話題にすることは、難しいと感じていた。セクシュアリティについて、すでに相談担当者に伝えられている場合であっても、グループ内で具体的な話題に触れることは、担当者が対応に困るのではないかと考え、他の利用者とは共有できる話にとどめて話していた。これは、その場を継続利用するためのストラテジーである。しかし、一方で薬物使用や使用欲求に関連する具体的な行動まで触れることができないことで、自分の内省も深まりにくさを感じていた。

前述したように、異なるセクシュアリティをもつ利用者との共通点への気づきや、自分と異なる経験の新鮮さは、継続参加の要素となっていた。しかし性

行動に焦点化して取り上げる場合は、同じセクシュアリティである利用者のグループであることでの話しやすさを感じていた。

「そうですね。やっぱり避けては通れない話題なので、その部分を正直に言える場があれば回復には結構役立つかなとは思っています。」「でも、基本的に皆の前でそういうことを言う自体、結構タブー化されてるような、今まで振り返って。「あ、そっか。女性でもやっぱりあるじゃん」とかって正直思えて。で、そこ掘り下げないっていうのも、ちょっともんもんとするところがあります。」

3. 精神保健福祉センターの支援者の支援意図と利用者の経験との関連

表 4.2 の左側は、昨年度に本研究班で実施した精神保健福祉センターの薬物相談担当者が HIV 陽性である MSM の薬物使用に関する相談支援を行った経験から支援方法や支援での配慮点の導出結果である。これらの支援者側の認識と今回の利用者の経験について、カテゴリーの意味内容からその関連性を検討し、線で結んだ(表 4.2)。なお本文では、利用者の経験から抽

出された概念を<>で、精神保健福祉センターの相談担当者の支援方法および配慮点に関する概念を「」、大カテゴリーを『』で示した。

利用者の利用動機である<公的機関への安心感>や<通報がなされないことへの安心感>は、相談担当者の「公的機関としてニュートラルな立場を維持する」と「通報に関する立場をはじめに説明し安心できる場であることを伝える」といった『支援姿勢』とも合致している内容であった。また、<精神保健相談としての専門機能への期待>といった利用動機は、相談担当者が認識している「治療や回復支援の導入機関として役割を果たす」という点と関連していた。

継続利用理由では、自分と異なるセクシュアリティをもつ利用者とともにプログラムに参加することで、その共通性や相違点をとおして気づきや内省につながっており、それらは、相談担当者が「薬物相談の基盤である「生きづらさへの支援」は共通していると捉え」て相談支援を展開している支援の姿勢と合致するものであった。また、<プログラム利用と連動した個別の伴走支援>は、「個別の相談を主におき、支援ツールであるグループプログラムや他の地域資源を活用す

表 4.2 精神保健福祉センターの薬物相談利用者の経験と相談担当者の支援方法や配慮点

薬物相談利用者の経験		関連性	相談担当者の支援方法や配慮点	
(1) 利用の動機	① 公的機関として安心感		① 公的機関としてニュートラルな立場を維持する	(1) 支援の姿勢
	② 「通報」されないことへの安心感		② 通報に関する立場をはじめに説明し安心できる場であることを伝える	
	③ 精神保健相談としての専門機能への期待		③ 薬物相談の基盤である「生きづらさへの支援」は共通していると捉える	
	④ 「ゲイ・コミュニティ」のネットワーク外であることへの安心感		④ つながり続けることをめざす	
(2) 継続利用理由	① 利用者のもつ課題の共通性への共感		⑤ 相談者の相談行動をねぎらい相談者に伴奏する	(2) 相談者との相談関係を築くための支援方法
	② プログラムの参加しやすさや楽しさ		⑥ リスク行為や性行為に伴う薬物使用の話題に対しても非審判的態度に徹し、ありのままを受け止める	
	③ プログラム利用と連動した個別の伴走支援		⑦ セクシュアリティに関する情報は相談者を理解するための重要な情報として扱う	
(3) 継続利用のためのストラテジー	① HIV ステータス / セクシュアリティ開示の判断		⑧ 性行動や性行為に関連する話題を踏み込んで扱える場の設定を考える	(3) 地域との連携と連携方法
(4) 利用にあたっての課題	① 性に関する話題を出しにくさや深まりにくさ		⑨ 治療や回復支援の導入機関として役割を果たす	
			⑩ 生活支援のために地域の支援機関と連携する	(4) 相談継続のための支援体制
			⑪ セクシュアリティは薬物使用に影響する重要な情報として連携機関への開示を話し合う	
			⑫ 支援者の葛藤へのスーパーバイズ体制	
			⑬ 個別の相談を主におき、支援ツールであるグループプログラムや他の地域資源を活用する	

る」という体制の下で行われている「相談者の相談行動をねぎらい相談者に伴奏する」支援方法や「生活支援のために地域の支援機関と連携する」連携方法との関連があった。

利用者は継続利用のためのストラテジーとして、＜HIV ステータス / セクシュアリティ開示の判断＞を行い、相談担当者には開示をしていた。この点に関連している相談担当者側の要素には、「リスク行為や性行為に伴う薬物使用の話題に対しても非審判的態度に徹し、ありのままを受け止める」があった。

利用者は精神保健福祉センターの薬物相談プログラムがセクシュアルマイノリティに限定した場ではないことでの利用しやすさやメリットを感じている一方で、「性に関する話題の出しにくさや深まりにくさ」を感じていた。この点に関連している相談担当者が意識している支援方法は、「セクシュアリティに関する情報は相談者を理解するための重要な情報として扱う」や「性行動や性行為に関連する話題を踏み込んで扱える場の設定を考える」であった。

D 考察

1. MSMであるHIV陽性者の利用経験から捉えた精神保健福祉センターが果たしている機能

2021 年度に実施した本研究班の精神保健福祉センターの相談担当者への調査結果から、精神保健福祉センターの機能は、次の3点が考えられた。すなわち、①回復支援への入り口としての機能、②安心して相談できる場としての機能、③いつでも戻ってくるのできる場としての機能である。これらのうち、①回復支援への入り口としての機能、②安心して相談できる場としての機能は、利用者の経験に関する調査結果においても、見出された。とりわけ②安心して相談できる場としての機能において公的機関であることへの信頼が基盤にあると考えられる。公的機関であることへの信頼には、情報の秘匿や「通報」に関すること、無料であることなどが含まれており、これらはセクシュアリティに関わらず、薬物相談にあたっての共通した機能と考えられる。

また、利用者が精神保健福祉センターを利用する理由では＜「ゲイ・コミュニティ」のネットワーク外であることの安心感＞が、継続利用理由では AA スタイ

ルではない＜プログラムの参加しやすさや楽しさ＞が抽出された。これらは精神保健福祉センターが意図したものではないが、利用者にとっては重要な選択肢となっていた。ゲイ・コミュニティの社会関係の狭さへの不安やフリーな語りを中心としたミーティングへの苦手意識を持つ場合などは少なくなく、地域においては多様な薬物依存症の回復プログラムや場が求められていると考えられる。

2. HIV陽性であるMSMの薬物相談にあたってのセクシュアリティやHIVステータスの持つ意味

調査対象者は、精神保健福祉センターでの相談を開始するにあたって、自らの HIV ステータスやセクシュアリティについて相談担当者に開示をしている。これは、薬物使用が性行為に伴うであること、セクシュアリティや HIV の受け止めやそれに伴う社会的関係が薬物使用と関連しており、セクシュアリティや HIV 陽性であることは、薬物使用の問題の根幹にかかわることであるという認識によるものであった。それはプログラム参加後、異性愛者の薬物使用経験の話を聞き、共通する点の気づきを得ながらも、性行為に伴う薬物使用に関して、具体的な話ができないことで、自らの問題を深めていくことが難しいと感じている。また HIV 陽性であることをグループ内で共有することを申し出たが、その機会がなかったことについて、薬物使用と HIV 感染についてより深く扱ってほしいという声が聴かれた。すなわち、性行為や HIV 感染に関する話題は、薬物使用からの回復にとって根幹にあると認識していることを意味していると考えられた。同じセクシュアリティのメンバーが参加しているプログラムに薬物使用や薬物欲求に関連して具体的な性行為が共有できる場へのニーズも高いと考えられる。

精神保健福祉センター相談担当者は、MSM あるいは HIV 陽性者への支援にあたっては「セクシュアリティに関する情報は相談者を理解するための重要な情報として扱う」、「性行動や性行為に関連する話題を踏み込んで扱える場の設定を考える」という点を重視していた。一方で、利用者の経験では、具体的な性行為に関連する話題を出すことは、相談担当者が困るのではないかと考え控えるという面がみられていた。相談担当者がセクシュアリティや HIV 陽性であることに関する知識をもつことや自らの性に関する認識、価値

意識等を対象化し、準備性を高めることは、利用者が率直に話をできる相談展開において重要であると考えられる。さらに、セクシュアルマイノリティの利用者が複数参加している精神保健福祉センターでは、性行為を扱う回のみ、セクシュアリティを分けてプログラムを実施しており、そのような集団プログラムの工夫、他のミーティングとの併用などの検討が求められる。

3. 本調査の限界と今後の課題

本調査は4名の精神保健福祉センター利用者の経験であり、MSMであるHIV陽性者の精神保健福祉センターにおける薬物相談の利用経験が網羅的に抽出されたとは言えない。また、全国の精神保健福祉センターの体制は多様であり、地域によってその経験もさまざまであると考えられる。

今後、本調査および昨年度の精神保健福祉センターの相談担当者調査の結果を踏まえ、精神保健福祉センターでのMSMであるHIV陽性者の薬物相談にあたってのより効果的な支援方法について、精神保健福祉センターや地域の支援機関、当事者等とともに検討を重ねる予定である。

E 結論

精神保健福祉センターでの薬物相談経験のあるMSMであるHIV陽性者に精神保健福祉センターでの相談経験に関するインタビュー調査を行った。インタビューデータの質的分析をとおして、MSMであるHIV陽性者にとっての精神保健福祉センターの薬物相談の意義と課題を抽出した。

その結果、利用動機で4概念、利用継続理由で3概念、継続利用のためのストラテジー1概念、回復に向けた課題で1概念が抽出された。さらに抽出された概念と、精神保健福祉センター相談担当者のインタビュー調査から抽出された支援方法に関する概念の関連性を検討した。

これらの結果から、精神保健福祉センターでの薬物相談は、MSMであるHIV陽性者にとって多様な選択肢として意義があると思われる。さらに性行動と薬物使用に関して具体的に扱うことができるように、プログラムの体制の工夫や職員の準備性の向上が求められると考えられる。

< 引用文献 >

- 1) Maxwell S., Shahmanesh M., Gafos M. : Chemsex behaviours among men who have sex with men: A systematic review of the literature. *Int. J. Drug Policy* 63, 74-89, 2019.
- 2) 戸ヶ里 泰典, 井上 洋士, 細川 陸也, 他 : HIV陽性男性における薬物使用状況と抗HIV薬内服状況およびハイリスク性行動との関連. *日エイズ会誌* 17, 407, 2015.
- 3) 生島嗣, 岡本学, 池田和子, 渡部恵子, 遠藤知之, 伊藤ひとみ, 若林チヒロブロック拠点病院とACCにおける「健康と生活調査」薬物使用の状況. *日本エイズ学会誌*, 16(4), 580, 2014.
- 4) 大木幸子 : 精神保健福祉センターにおけるMSMおよびHIV陽性者への相談対応の現状と課題に関する調査, 令和3年度 総括・分担研究報告書 地域においてMSMのHIV感染・薬物使用を予防する支援策の研究, p59-66, 2022.

F 研究発表

なし

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし